人間行動学専攻

社会学

心理学

教育学

地理学

人材育成の目標

人間行動の特性や人間と社会および文化の関係を、とくに社会問題、教育問題や文化摩擦など現代社会が抱える諸問題を視野に入れて、総合的、学際的に捉えることを目的とする。フィールドワークや実験という行動科学の方法論を基礎に、実証的なデータに基づく分析と理解や理論化を重視する。人間行動に関する実証的な研究方法を修得させることによって、現実の社会や人間を客観的に観察する能力を涵養し、研究職のみならず、高度な専門的知識と技術をもった人材を養成する。

社会学専修

人間行動学専攻

専修紹介

大阪市立大学社会学専修の研究上の特色は、現場に密着したフィールドワークの伝統にあります。もちろん、フィールドワークといっても、アンケートに基づく量的手法、各種文献・映像資料を軸とした分析、さらにはライフ・ヒストリーやライフ・ストーリー、インタビューあるいは参与観察にいたる質的手法もすべて含まれます。シカゴ社会学流の用語でいえば、“down-to-earth”が一つの主要な背骨をなしているといえるでしょう。

対象面に関していえば、大阪という日本を代表する大都市の公立大学である点から、都市に関わる諸問題に関する実証的な研究の蓄積が、上記の志向性と関連した社会学専修の一つの特色になっています。もちろん、個々の研究者あるいは院生の関心によって、家族、医療、ジェンダー、メディア、文化、民族、宗教、地域、労働、政策、教育、福祉など実に多様な領域を対象とした社会学的研究が展開されてきていますが、それでもグローバル都市・大阪というフィールドを背景とした研究、社会問題、人と移動への関心と志向性がゆるやかな共通性を示しています。

同時に、上記二点の特色は、社会学全般の領域に対する幅広い視野と理論的視座に裏打ちされてのものであることを強調しておきたいと思います。何を、いかなる観点から問題とし、それがいかなる研究上・実践上の意義を持つのかを見通す力がなければ、“down-to-earth”は「木を見て森を見ない」誤謬を免れないからです。

教育方針

社会学専修は、人間と社会の相関関係を分析する高度な社会学的専門知識を学ぶことにより、研究者としての資質の向上とともに、高度専門職業人として社会で活躍しうる人材の育成を目指しています。この目的を達成するために、カリキュラムを理論系と調査系の２本柱で総合的に構成しています。「理論なき調査は盲目であり、調査なき理論は死んでいる」という有名な言葉がありますが、理論と調査は互いに他を前提としあう車の両輪のような関係にあり、どちらも大切なことはいうまでもありません。

前期博士課程のカリキュラムの内容は理論系・調査系に大別されますが、修士論文の作成に関しては指導教員による定期的演習・指導とならんで、年２回の報告会で論文内容を発表することが義務づけられていて、指導教員以外の教員、また院生からの質疑応答を受けることになっており、集団指導体制をとっています。自分の研究テーマが、社会学という広い枠のなかでどのような位置にあるのかを確認する機会ともなっています。

後期博士課程では、基本的に博士論文の作成に向けての指導が中心になりますが、各年度末に当該年度の進捗状況の報告が課されます。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/soc/

専修の特色

教室行事

4月：新年度ガイダンス、都市文化研究センター研究員との交流会、5月：新歓コンパ、6月：前期博士課程大学院入試説明会、7月：中間報告会（集中授業）、8月：オープンキャンパス、10～11月:研究報告会（集中授業）、大学院入試説明会、12月:後期博士課程／前期博士課程、2月：追い出しコンパ、などのように、年間を通したさまざまな教室行事（研究科主催を含む）があります。大学院生を中心とした読書会や研究会も活発に行われています。

出版物

《学術雑誌》『市大社会学』（発行：市大社会学研究会）

社会学教室では、大学院生の研究発表の媒体として、2000年より査読付き論文誌を発行しています。これまで多くの院生が、全国学会誌・専門学会誌に投稿する前のトレーニングの機会として活用し、研究のステップアップにつなげています。

オンラインジャーナル『市大社会学』http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/soc/js/

その他の特色

《資格》専門社会調査士

一般社団法人社会調査協会が認定する「専門社会調査士」の資格が取得可能です。研究職を志望する人はもちろん、行政や企業に就職をするさいにも役立ちます。他大学出身者も、大学院の専門科目とあわせて学部授業の単位を別途取得することにより申請することができます。

《共同研究》都市・大阪に関する文化資源・社会調査データアーカイブの構築

社会学教室では、学内の戦略的研究として、これまで収集・実施されてきた、都市・大阪に関する文化資源、社会調査、研究資料、研究成果の統合的データアーカイブを構築するプロジェクトを実施しました（2013～2014年度）。大阪の文化・社会に関する多様な研究と資源の蓄積を活かして自らの研究を進める環境が整備されています。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/soc/i_juten2013/index.html

所属教員

進藤　雄三（理論社会学、医療社会学、家族社会学）

石田　佐恵子（文化社会学、映像社会学、メディア文化研究）

伊地知　紀子（生活世界の社会学、地域社会学、朝鮮地域研究）

川野　英二（社会政策の社会学、比較社会学）

笹島　秀晃（都市社会学、文化社会学、歴史社会学）

進藤 雄三　教授

SHINDO Yuzo

専門分野

社会学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

理論社会学、医療社会学、家族社会学を主要な研究領域としている。理論的志向性を基軸に、医療および家族領域を対象としてきた。具体的には、医療領域では特に専門職論、および医療化論を中心に、家族領域では「家族に介入する社会」、家族の医療化、近代家族論を中心に研究を進めてきた。比較的最近では、逸脱の医療化の国際比較を行っており、現在では日本における死の医療化をてがかりに、「死の社会学」という領域に取り組んでいる。

メッセージ・教育方針

「理論なき調査は盲目であり、調査なき理論は死んでいる」――本当にその通りだと痛感しています。自分のしている、しようとしている研究が何であるのか、そのアイデンティティは、社会学内部における「他者」との比較、そして社会学外部の「他者」との比較を通してしか、確認の術はありません。そしてその「比較」を可能にする二つの手段が「理論と調査」ではないでしょうか。

［主要業績］

［著書］『医療の社会学』（世界思想社，1990）
『逸脱と医療化』（ミネルヴァ書房，2003，監訳）
『社会的コントロールの現在』（世界思想社，2005，共編著）
『近代性論再考』（世界思想社，2006）
『医療化のポリテイクス』（学文社，2006，共編著）
『新たなる排除にどう立ち向かうか』（学文社，2009，共編著）
『社会学』（医学書院，2012，共著）
『社会学の技法』（恒星社厚生閣，2012，共訳）
『社会学入門』（ミネルヴァ書房，2017，共著）

石田 佐恵子　教授

ISHITA Saeko

専門分野

社会学

最終学歴 ▶ 筑波大学大学院社会科学研究科

学　　位 ▶ 博士（社会学）

［研究内容］

文化社会学のなかでも、特に、映像社会学・メディア文化研究を専攻。最近の研究内容は、「グローバル化時代のテレビ研究の方法と実践」「現代文化における〈有名性〉の力と作用についての研究」「現代文化研究の展開と理論的考察」「テレビ･アーカイブズの公共性」など。有名人、マンガ、韓流ブーム、クイズ文化、ミュージアムなど、幅広いテーマから、国境を越えて拡大する現代メディアの文化について考えています。
個人ＨＰ：http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/ishita/

メッセージ・教育方針

社会学的な研究法を身につけ、現代メディアの文化を対象に研究を進めていきたい方、ぜひ一緒に研鑽を積みましょう。自分が探求したい研究テーマについてオリジナリティを持って自律的に考えていくことが出来る学生、特に国際交流や留学に興味のある学生を募集しています。メディア関係の高度専門職業人（社会人入試）、留学生も歓迎します。

［主要業績］

［著書］『ポピュラー文化ミュージアム』（ミネルヴァ書房，2013，共編）
『ポスト韓流のメディア社会学』（ミネルヴァ書房，2007，共編）
『クイズ文化の社会学』（世界思想社，2003，共編）
『有名性という文化装置』（勁草書房，1998）
［論文］「ムービング・イメージと社会　映像社会学の新しい研究課題をめぐって」（『社会学評論』日本社会学会，237（60-1），2009）
"Media and Cultural Studies in Japanese Sociology: An Introduction,"（*International Journal of Japanese Sociology*, the Japan Sociological Society, vol.11, 2002）

伊地知 紀子 教授

IJICHI Noriko

専門分野

社会学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

私は、大阪に最も多く住んでいる韓国・済州島出身の人びとに出会い、これまで20年間済州島と日本の在住地域でフィールドワークをしてきました。権力の圧制により移動を余儀なくされた人びとが創りだしてきた共同性、それを支える生活世界に関心があります。こうした他地域の異文化な人びとについての研究は、実のところ私たちの生活と関わりがあるのです。私たちは、日々の生活のなかで大小様々な事態に翻弄されながらも誰かと共に対処する場面に立ち会います。そんなとき必要な想像／創造力の源泉とは何か？ここに私の関心の種があります。

メッセージ・教育方針

私が担当するのは異文化理解、人びとの移動史、エスニック・コミュニティなどです。これらの内容について、「なぜ？どうして？」という問いを持つことを重要視します。個々のテーマに関する既存文献をこれでもかというくらい読み、関連する場所で生きる人びとに出会ってみることをお勧めします。

［主要業績］

［著書］『消されたマッコリ。―朝鮮・家醸酒（カヤンジュ）文化を今に受け継ぐ』（社会評論社，2015，単著）
Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life,（New York: Palgrave, 2015, 共編著）
『日本人学者가 본 제주인의 삶（日本人学者が見た済州人の生）』（済州大学校耽羅文化研究所，2013，単著）
『生活世界の創造と実践―韓国・済州島の生活誌から―』（御茶の水書房，2000，単著）

川野 英二 教授

KAWANO Eiji

専門分野

社会学

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院人間科学研究科

学　　位 ▶ 博士（人間科学）

［研究内容］

「グローバル化」がローカルな社会生活に及ぼす影響が地域固有の文脈によってどのように異なるのか、またローカルな文脈効果を考慮に入れた貧困と社会問題の実証研究に関心がある。現在は、大阪とパリを主なフィールドとして、海外の大都市の都市社会政策および社会問題の国際比較を行っている。理論的には「分析社会学」や「関係社会学」と呼ばれるアプローチ、方法論的にはマルチレベル分析、シークエンス分析、社会ネットワーク分析など最先端の研究をとりいれながら、地域モノグラフや生活史などの down-to-earth な調査も行う。

メッセージ・教育方針

実証研究を行うためには、自分のフィールドをもつ、丁寧なデータの収集と分析、新しい理論や分析手法の吸収、外国語の習得の努力のいずれも欠かすことはできないが、大学院のゼミではとくに調査データの収集と分析の方法に焦点を当てて教育を行なっている。

［主要業績］

［翻訳］『資本主義の新たな精神』（ナカニシヤ出版，2013，共訳）
［論文］「大阪市民の貧困観と近隣効果―貧困層は対立しているのか？」（『貧困研究』第 9 号，2012，明石書店）
“Insécurité de l'emploi et insécurité de parcours des travailleurs japonais”（*Information sociales* no.168, 2012, CAF）
［その他］「東京オリンピックの前に、都市社会政策と貧困を考える」（『シノドス』，2013 年 12 月 31 日，http://synodos.jp/society/6608）

笹島 秀晃　准教授

SASAJIMA Hideaki

専門分野

社会学

最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

第二次大戦後の産業社会から脱工業社会という社会構造の変化における都市空間の変動について研究しています。特に近年は、戦後ニューヨークにおける芸術産業の興隆と都市の空間の推移について、歴史資料・インタビューデータ・参与観察などの質的な社会調査の手法を用いて研究を行っています。新都市社会学・ジェントリフィケーション論などの都市社会学的視点、制度論的・組織論的な文化社会学の視点、一次資料を重視しつつ社会学理論を応用して事例を分析する歴史社会学、これら三つのパースペクティブを大事にしています。

メッセージ・教育方針

社会学では現象のメカニズムを説明するために簡潔な理論的分析が重視されます。その一方で都市社会学では、確かなデータに基づき厚みをもって事例を記述することも大事だと思っています。議論を通して、理論的視点と事例の記述のバランスのとれた都市社会学的なモノグラフの面白さを伝えていければと考えています。

［主要業績］

［論文］「SoHo の芸術家街の形成とジェントリフィケーション」（『日本都市社会学年報』第 32 号，2014）

「都市における秩序と多様性：ジェーン・ジェイコブスと割れ窓理論」（吉原直樹編著『安全・安心コミュニティの存立基盤』御茶の水書房，2013）

“From Red Light District to Art District: Creative City Projects in Yokohama’s Kogane-cho Neighborhood,”（*Cities*, 33, 2013）

「創造都市と新自由主義：デヴィッド・ハーヴェイの企業家主義的都市論からの批判的視座」（『社会学年報』, 41, 2012）

心理学専修

人間行動学専攻

専修紹介

心理学専修では、実験心理学を基礎とした「行動・生理」、「認知」、「社会・文化」の専門分野の教育・研究指導を通して、基礎心理学分野における研究者の養成とともに、現代社会が直面する諸問題に心理学的観点から対処できる高度な専門知識を持った人材の養成を目指しています。そのために、実証科学的方法論を重視した教育・研究体制が組まれており、臨床分野を除くあらゆる心理学諸分野の、基礎から応用にわたる幅広いテーマについて、学び研究することができます。また、多くの実験室を有し、実験設備も充実しています。

教育方針

前期博士課程・後期博士課程のいずれにおいても、希望する研究テーマに合った教員の指導の下で、研究テーマの選定から学術雑誌への論文投稿に至るまで、研究者に求められる態度・知識・技能が習得されるよう、指導が進められます。

前期博士課程では、主に「研究指導」において、研究テーマの設定、実験・調査などの研究方法並びにデータ解析法、さらに論文の構成・形式など、修士論文作成のための知識・技能を習得できるよう、指導がなされます。

後期博士課程では、「論文指導」において、下記の段階を通して、博士論文作成のための指導がなされます。

１年次では、博士論文作成のための研究を行うのに必要な理論、実験・調査などの方法並びにデータ解析法に関する応用的な知識と技能を習得します。各大学院生が、自分の研究課題に即した分野の専門書や学術論文を批判的に検討し、課題に関する研究計画を立案できるよう、指導します。

２年次では、博士論文の研究課題に関連する国内外の論文を検討しながら、研究計画に基づいて実験・調査を実施し、収集したデータの解析を行います。こうした研究遂行の指導を通して、博士論文の完成を目指します。

３年次では、実験・調査データをまとめ、博士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させます。

前期博士課程・後期博士課程ともに、大学院生以上をメンバーとして月１～２回のペースで開催している「金曜研究会」において研究の進捗状況の報告を行い、報告内容について教員や他の学生達と討論を行うことで、研究を深めていきます。また、指導教員の指導の下、研究成果を国内外の学会で発表し、学会誌に投稿するといった、プロの研究者としての研究活動についても学んでいきます。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/psy/

専修の特色

教室行事

4月：教室ガイダンス、5月：第1回卒業論文指導会、6月：新入生歓迎コンパ、7月：第2回卒業論文指導会、8月：オープンキャンパス、集中講義、12月：第3回卒業論文指導会、集中講義、2月：修士・卒業論文口頭試問、追い出しコンパ、動物供養会

この他、金曜研究会（毎月1～2回）や、海外から招いた研究者による講演やワークショップを行っています。

出版物

『大阪市立大学文学部心理学教室 25年のあゆみ』（1975）
『大阪市立大学文学部心理学教室 40年のあゆみ』（1991）

その他の特色

本学で提供されている単位を取得することにより、日本心理学会が定める「認定心理士」の資格申請に必要な単位をそろえることができます。また、日本心理学諸学会連合が行っている「心理学検定」の受験を薦めています。

＜心理学教室が主催・共催する学術イベント＞

OCU International Psychology Workshop on Inference、OCU International Psychology Seminar、行動数理研究会、人間行動分析研究会

＜心理学教室の教員・大学院生が所属する学会＞

日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会、日本感情心理学会、関西心理学会、Society for Personality and Social Psychology、Association for Psychological Science、Asian Association of Social Psychology、日本認知心理学会、日本発達心理学会、日本動物心理学会、日本神経科学学会、日本神経精神薬理学会、日本認知科学会、日本行動分析学会、日本基礎心理学会、Association for Behavior Analysis International (ABAI)、Society for the Quantitative Analyses of Behavior (SQAB)

所属教員

池上　知子（社会心理学、社会的認知、偏見と差別、社会的アイデンティティ理論、システム正当化理論）

山　祐嗣（認知心理学、推論、思考の潜在性・顕在性、比較文化研究）

川邉　光一（生理心理学、行動神経科学、精神薬理学、高次認知機能・精神疾患の脳内機構）

佐伯　大輔（学習心理学、判断、意思決定、選択行動）

池上 知子　教授

IKEGAMI Tomoko

専門分野

社会心理学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院教育学研究科

学　　位 ▶ 博士（教育学）

［研究内容］

人は自分が暮らす世界をどのようにとらえているのか、他者や集団、さまざまな社会的出来事をどのように理解し記憶しているのかを研究しています。他者に対して抱く印象や集団に対してもつイメージには、偏りや誤りがみられます。なぜ、そのような偏りや誤りが生ずるのか、その心理学的メカニズムを解明することが研究の目標です。最近は、人間社会からなぜ差別や偏見がなくならないのか、人々はなぜ平等主義の理念と矛盾する現実を変えようとしないのかについて、深層にある心理にも関心を向けています。

メッセージ・教育方針

私の研究室では、教員、大学院生、学部学生が、相互に協力しながら、さまざまな研究プロジェクトを企画、立案し、遂行しています。指導し、指導されるという関係を超えて、皆で力を合わせ、対等な立場で共同研究を進めていくという方針で臨んでおります。

［主要業績］

［著書］『社会的認知の心理学―社会を描く心のはたらき―』（ナカニシヤ出版，2001，共著）
『格差と序列の心理学：平等主義のパラドクス』（ミネルヴァ書房，2012）

［論文］“State self-esteem as a moderator of negative mood effects on person impression.”（*Journal of Experimental Social Psychology*, Vol.38, 2002, Elsevier）
“Precursors and consequences of ingroup disidentification: Status system beliefs and social identity.”（*Identity: An International Journal of Theory and Research*, Vol.10, 2010, Psychology Press）
「差別・偏見研究の変遷と新たな展開―悲観論から楽観論へ―」（『教育心理学年報』第 53 集，2014）

山 祐嗣　教授

YAMA Hiroshi

専門分野

認知心理学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院教育学研究科

学　　位 ▶ 博士（教育学）

［研究内容］

人間がどのように推論を行うのかという研究を通して、ヒトの合理性とは何かという問題に取り組んでいます。現在、(1) 潜在的な過程の合理性と顕在的な過程の合理性はどのように区別されるのか、(2) 推論はそれぞれの文化においてどういう意味で合理的か、という問題に興味をもっています。遠い目標として、文化多様性の源泉に辿りたいという野望はありますが、それは途方もないものであるということは自覚しています。

メッセージ・教育方針

卒業論文、修士論文、博士論文の指導において、自由にテーマを選んでもらうのか、私のテーマの範囲内で行ってもらうのか、常にジレンマがあります。始まりは私とは異なるテーマであっても、最終的に同じ問題（たとえば、「ヒトはどういう意味で合理的か」など）を扱うことができれば、理想的ではないかと思っています。現実的なこととして、学術雑誌への投稿は強く奨励しています。

［主要業績］

［著書］『思考・進化・文化―日本人の思考力』（ナカニシヤ出版，2003）
『メンタリティの構造改革―健全な競争社会に向けて』（北大路書房，2012）

［論文］“A cross-cultural study of hindsight bias and conditional probabilistic reasoning,”（*Thinking and Reasoning*, 16, 346-371, Psychology Press.）
“A dual process model for cultural differences in thought,”（*Mind and Society*, 6,143-172, Springer.）
“Matching versus optimal data selection in the Wason selection task,”（*Thinking and Reasoning*, 7, 295-311, Psychology Press.

川邉 光一　准教授

KAWABE Kouichi

専門分野

生理心理学・行動神経科学

最終学歴 ▶ 筑波大学大学院心理学研究科

学　　位 ▶ 博士（心理学）

［研究内容］

ラットを用いた行動実験により、学習・記憶を中心とした高次認知機能の脳内機構について薬物投与や脳損傷などの手法を用いて研究を進めている。また、統合失調症などの精神疾患の動物モデルを作成し、これらの動物の行動異常を測定して精神疾患モデルとしての妥当性を評価すると同時に、行動異常の原因となる脳内伝達物質系の変化を調べている。これらの研究はヒトにも共通する脳内機構の探求を目指すものである。同時に、これらの高次認知機能や行動異常を測定するための行動課題の開発・評価も行っている。

メッセージ・教育方針

生理心理学、行動神経科学という分野は心理学だけではなく、神経系に関する生物学的知識が必須とされる。専門書や研究論文の精読により、これらの知識を確実に身につけてもらいたい。また特殊な実験技法を習得し、これを正しい手続きに基づいて実施することが適切な実験データを得るために必要となる。これらの知識や技法の理解と習熟を通して、自然科学的な考え方を育んでほしい。

［主要業績］

［論文］“Effects of chronic forced-swim stress on behavioral properties in rats with neonatal repeated MK-801 treatment”（*Pharmacology, Biochemistry and Behavior*, vol.159, 2017）

“Effects of neonatal repeated MK-801 treatment on delayed nonmatching-to-position responses in rats.”（*NeuroReport*, vol. 19, 2008）

“Repeated treatment with N-methyl-D-aspartate antagonists in neonatal, but not adult, rats causes long-term deficits of radial-arm maze learning,”（*Brain Research*, vol. 1169, 2007）

「新生仔期 NMDA 受容体拮抗薬反復投与動物の行動特性―統合失調症動物モデルとして―」（『人文研究』第 65 巻, 2014）

佐伯 大輔　准教授

SAEKI Daisuke

専門分野

学習心理学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

主に学習心理学の観点から、ヒトや動物の意思決定や選択行動に関する研究を行っています。例えば、「今もらえる1万円」と「6カ月後にもらえる2万円」のように、「すぐにもらえる小さい報酬」と「待たされた後にもらえる大きい報酬」の間の選択場面で前者を選ぶことを「衝動性」、後者を選ぶことを「セルフコントロール」といいますが、このような選択を説明するための理論や、選択に影響する要因について研究しています。他に、リスク状況下での選択や、社会場面における協力選択に関する研究も行っています。

メッセージ・教育方針

私の研究している「学習」とは、ヒトや動物の行動が経験によって変化することを指しますが、このことは、環境条件を整えることで、行動をより望ましい方向に変えることができるという見方を提供してくれます。周囲の環境を変えることが難しい場合もありますが、この行動観は、私の研究・教育に役立っていると思います。

［主要業績］

［著書］価値割引の心理学―動物行動から経済現象まで―』（昭和堂, 2011）

『はじめての行動分析学実験― Visual Basic でまなぶ実験プログラミング―』（ナカニシヤ出版, 2011, 共著）

［論文］“Sharing, discounting, and selfishness: A Japanese-American comparison,”（*The Psychological Record*, Vol. 61, 2011, 共著）

“Humans’ temporal and probabilistic discounting derived from choice proportions in a choice situation,”（『人文研究』第 61 巻, 2010 年, 共著）

“Choice between constant and variable alternatives by rats: Effects of different reinforcer amounts and energy budgets,”（*Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, Vol. 73, 2000, 共著）

教育学専修

人間行動学専攻

専修紹介

【広義の教育方法学】本専修の教育研究体制は、学習指導論、教育課程論、学校制度論、社会教育論、教育行政論、教育政策論など現実の教育の実施の仕方に直接かかわる研究、およびそれらの基礎理論としての教育哲学（教育思想）、教育心理学、教育社会学、人間関係学などの研究を「広い意味での教育方法学」とし、教育史はこれらの時間的発展、変化の相において把握するものと位置づけることで発足・発展してきました。現在では、人間行動学を基礎的な理論としながら、学校教育及び学校外教育の両面にわたる思想や制度、実践等に関する研究（授業の研究、教育コミュニケーションの研究、高等教育を含む教育行政の研究等）を中心に、これらの事象を時間的な発展・変化の相で捉える教育史的なアプローチ、また世界の広がりの中で捉える国際比較的アプローチが主として用いられています。

【教育研究の特色】本専修の教育研究の特色は、「共同（協働）性」:「研究者や教育実践現場での教育者たちが共同（協働）しながら研究に取り組むこと」、「実践性（臨床性）」:「教育現場（大学における教員養成も含む）への貢献を目指す研究を行うこと」、「学際性（越境性）」:「教師論、カリキュラム論、学校経営論などさまざまな立場から研究を行うこと」です。特に、「学際性（越境性）」が本専修の最大の特色です。多様な専門領域を背景とする教員集団と触れ合うことで、大学院生たちは自らの専門分野に限定されずに、幅広い視点で教育という事象を見つめ研究することができます。

教育方針

【研究者・高度専門職業人・高度教養人の育成】本専修は、前期博士（修士）課程及び後期博士課程を通して、教育学の分野における先端的知識と方法を身につけ、独創的な研究を自ら行いうる研究者養成を主軸としています。もちろん、前期博士課程を修了し、そこで習得した教育学の専門的知見等を活用することで、今日の社会的な問題等の解決に応えうる高度専門職業人（専修免許状を有する学校教諭など）、また、生涯学習への意欲をもち、人間、社会、文化、言語に対する深い理解を通して、国際社会・地域社会においてさまざまな文化的活動を担うことのできる高度教養人の育成も行っています。

【カリキュラムの特色】より学際的で異分野間交流を促す教育研究の推進をカリキュラムの理念としています。具体的には、教育基礎学（思想・歴史）を基本として、教育方法学（授業・教育課程論等）が中心をなし、その周辺に教育行政・経営論や教師教育学、教育文化論等を配置するという形で構成されています。

【個別及び複数による総合指導体制】課程の修了に際して、前期博士課程の大学院生は修士論文を、後期博士課程の大学院生は課程博士論文を執筆することが求められます。これらの論文指導に対して、日常的な個別指導（正副担当教員）と定期的な合同指導（全教員）を行っています。また、前期博士課程の大学院生は修了に必要な単位数を考慮しながら講義・演習等を受講する必要がある一方で、後期博士課程の大学院生は、講義・演習とは別に設けられた「論文指導」の時間で指導を受けます。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/edu/

専修の特色

教室行事

《修士論文指導》構想発表会（前期博士1年対象）:年2～3回／合同指導会（前期博士2年対象）年2～3回。
《教育研究フォーラム》教員・大学院生対象：年2～3回開催。教員や大学院生が、現在取り組んでいる研究テーマに関する発表を主として行います。また、外部から講師を招聘して行うこともあります。
《教室旅行》教員・大学院生・学部生対象：10 ～ 11月頃に1泊2日で実施。専修・教室の親睦を図ることを目的とした旅行で、教育学に関する学習会が夜のレクリエーションとして実施されます。

出版物

《『教育学論集』》年1回、12月刊行。1975（昭和50）年より発刊されてきた教育学専修・教育学教室による学術雑誌です。教員や大学院生が主たる執筆者として数々の研究成果が掲載されてきました。2011（平成23）年12月発行の第38号からは、大阪市立大学教育学会（下記参照）の学会紀要として位置づけられ、内容の充実・発展を経て今日に至ります。

その他の特色

《大阪市立大学教育学会》2011（平成23）年12月に発足した組織で、本専修が事務局となっています。年次大会の開催（12月）や機関誌である『教育学論集』の発行（12月）といった活動を中心に行っており、さまざまな分野で活躍されている本専修の修了生の方々との貴重な研究交流の場ともなっています。ホームページもご覧ください（http://educa.lit.osaka-cu.ac.jp/ocuedu/index.html ／もしくは、「大阪市立大学教育学会」で検索）。
《本専修在学者（修士・博士）の出身校・前職など》[国内] 大阪市立大学（文学部・教育学教室／同・哲学教室／商学部／経済学部／理学部）、愛知教育大学、大阪大学、大阪教育大学大学院、京都教育大学大学院、神戸市外国語大学、滋賀大学大学院、滋賀県立大学、同志社大学大学院、和歌山大学、公立学校教員（小学校、高等学校）、など。[国外] 延辺大学（中国）、華東師範大学（中国）、など。

所属教員

添田　晴雄（比較教育学、比較教育文化史）
柏木　敦（教育史学、教育制度・政策論）
森　久佳（教育方法学、カリキュラム論、教師論）
辻野　けんま（教育経営学、教育行政・学校経営論）
島田　希（教育方法学、授業研究）

添田 晴雄　教授

SOEDA Haruo

専門分野

比較教育学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

比較教育文化史。教育文化は、あまりにも日常化しすぎて当事者にはほとんど意識されないが、教育の在り方や成果に対して決定的に重要な影響力をもつ。そのような日本の教育文化の特質をモノ（学校建築、黒板、学習具など）・コト（行事、時間割など）・言語に注目し、比較の手法を用いて究明している。とくに、教育文化のひとつであるメディアとしての音声言語と文字言語が学習場面や教育場面でどのような役割を果たしているかについて比較的、歴史的に研究している。

メッセージ・教育方針

研究方法論としての比較を身につけて欲しい。①たとえば「いじめ」と「bullying」のように、言語による言葉の意味の差異を敏感になること。②比較可能性や比較妥当性を吟味すること。③表面的な教育現象の比較に留まらず、その基盤となる社会的・文化的・歴史的背景を総合的に比較考察することである。

［主要業績］

［著書］ロイ・ロウ著／山崎洋子・添田晴雄監訳『進歩主義教育の終焉―イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか―』（知泉書館，2013）
杜成憲・添田晴雄編『城市中小学校課程開発的実践為課題―中日比較研究―』（華東師範大学出版社，中国語版，2005）
［論文］「『モノ』『コト』による比較教育史の可能性―学習具の歴史を事例に―」（教育史学会 50 周年記念出版編集委員会編『教育史研究の最前線』日本図書センター，2007）
「文字から見た学習文化の比較」「筆記具の変遷と学習」（石附実編著『近代日本の学校文化誌』思文閣出版，1992）
「『体罰』総論―比較研究のために―」（日本比較教育学会『比較教育学研究』第 27 号，2013）

柏木 敦　教授

KASHIWAGI Atsushi

専門分野

日本教育史

最終学歴 ▶ 日本大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（教育学）

［研究内容］

日本の初等教育制度政策の展開過程を、歴史的な観点から研究をしています。特に初等教育段階における子どもたちの「就学」「通学」が、どのようにして日常化するのか検討することを中心的な課題としています。「就学」「通学」を、子どもや子どもを取り巻く人々と、制度的背景や社会的背景との相互作用として捉え、その相互作用のありようをあきらかにすることを目指しています。現在取り組んでいるのは、日本における義務教育年限延長政策に関する研究です。

メッセージ・教育方針

過去を知るということは、現在を正確に理解するための作業であると位置づけています。そのため可能な限り一次史料に触れ、そして読み、過去に生きた人々や制度政策に込められた意図を読み取り、理解することが講義や演習の中心的作業になります。国語辞典、漢和辞典、くずし字辞典、歴史事典等々の辞書類は必携です。

［主要業績］

［著書］『日本近代就学慣行成立史研究』（学文社，2012）
「第三次小学校令の成立と実施に関する研究―就学督促の解釈と展開」（『地域教育の構想』同時代社，2010，共著）
［論文］「1900 年代における初等教育政策展開に関する考察」『日本の教育史学』（第 48 集，2005）
「日本近代初等教育史研究の課題と展望―初等教育就学に関わる研究を中心として―」『日本教育史研究』（第 25 号，2006）
「義務教育段階における二重学年制に関する研究：戦前期日本における二重学年制の導入とその反応」『人文論集』（第 48 巻，2013）

森 久佳　准教授

MORI Hisayoshi

専門分野

教育方法学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

教育方法学、特にカリキュラムや教師論を中心に、これまで、歴史的な事象をテーマとする研究（「歴史的アプローチ」からの研究）および現代的な事象をテーマとする研究（「現代的アプローチ」からの研究）を行ってきました。「歴史的アプローチ」からの研究としては、新教育運動期の教育実践史（方法史）・カリキュラム史研究、「現代的アプローチ」からの研究としては、「学校を基盤とするカリキュラム開発（School Based Curriculum Development）」に関する研究や教師及び教師教育（教員養成）に関する研究を行ってきました。

メッセージ・教育方針

理論と実践の総合化を学生と共に志向するために、「理論」と「実践」、「歴史的（視点）」と「現代的（視点）」の複層的・重層的なつながりを意識しながら講義・演習を行います。そうすることで、学生には、実践（現場）を視野に入れた理論的・思想的知見の把握を目指してもらいたいと考えています。

［主要業績］

［著書］『こどもと関わる』（ブイツーソリューション，2013，共編著）
『教師の仕事と求められる力量：新たな時代への対応と教師研究の知見から』（あいり出版，2011，共著）

［論文］“Development of a New Curriculum Leadership Model with a Focus on Its Relation to the Professional Learning Communities,” *Back to the Future: Legacies, Continuities and Changes in Educational Policy, Practice and Research*（2013, Sense Publishers, 共著）
「『共同体中心』学校を目指したデューイ実験学校の学習活動の体制とその特色に関する研究」（『教育方法学研究』日本教育方法学会，36，2011）

辻野 けんま　准教授

TSUJINO Kemma

専門分野

教育経営学

最終学歴 ▶ 京都府立大学大学院福祉社会学研究科

学　　位 ▶ 修士（福祉社会学）

［研究内容］

学校経営と教育行政に関心をもちながら、主にドイツを対象に研究しています。教育が創造的であるためには、教員や子どもによる主体的な活動が欠かせません（ミクロ・レベル）。しかし、その反面、ひとりひとりの努力だけで教育を創造的なものとするには限界もあります。ここから、学校組織（メゾ・レベル）や教育行政（マクロ・レベル）の役割に期待されることも大きくなります。さらにまた、人間が育つためには、学校「以外」の教育機会に目を向けることも重要です。こうした教育を構成する様々な条件を系統的に理解しようとする教育経営学が、主要な研究関心です。

メッセージ・教育方針

「教育は人なり」とよく言われますが、私たち自身が学校の校風はじめ組織の影響を受けてきたように、人間が組織や制度から様々な影響を受けるのが現実です。そこで、学生の皆さんが自分自身の問題関心をとりまく全体構造にも目を向けていけるように、一緒に様々な関連研究を読み解いたり実地に調査等をしたりしたいと思います。授業でも授業外でも、自由に皆さんと議論を交わせるようになりたいと願っています。

［主要業績］

［著書］「ドイツの学校は国家とどう付き合ってきたか」（『現代の学校を読み解く―学校の現在地と教育の未来―』春風社，2016，共著）

［論文］“Professional Responsibility of School Teachers in Public Education: An Analysis of German Educational Administration from a Japanese Perspective”, in: *Journal of the International Society for Teacher Education*（Vol.20, Issue. 1, 2016）

島田 希　准教授

SHIMADA Nozomi

専門分野

教育方法学

最終学歴 ▶ 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

学　　位 ▶ 博士（知識科学）

［研究内容］

授業研究を中心とする教育方法学研究に取り組んでいます。主に、初等中等教育の現場をフィールドとしながら、授業改善、カリキュラム開発、学校改善のプロセスを描き出すこと、それらに影響を及ぼす諸要因を明らかにすることを目指しています。近年では、「専門的な学習共同体」という概念に着目し、今日的な教育課題に対応しうる学校のあり方を探究しています。参与観察、インタビュー、アクション・リサーチなど、質的研究の方法論を用いて、実践の文脈性や個別性をふまえた分析を行うことを重視しています。

メッセージ・教育方針

学校をはじめとするフィールドに真摯に向き合い、そこから得たデータを様々な角度から読み解くための方法論を身につけてもらいたいと思います。そのためには、先行知見を丁寧に紐解き、自分なりの「切り口」を定めることが必要となります。このような研究を進めていく上での、「基本的な構え」を体得してもらえるよう、講義や演習を構想しています。

［主要業績］

［著書］『教育工学的アプローチによる教師教育』（ミネルヴァ書房，2016，共編著）

［翻訳］『教師と学校のレジリエンス：子どもの学びを支えるチーム力』（北大路書房，2015，共訳）

［論文］「学校における実践研究の発展要因の構造に関するモデルの開発：『専門的な学習共同体』の発展に関する知見を参照して」（『日本教育工学会論文誌』39（3），2015）

「アクション・リサーチによる授業研究に関する方法論的考察：その意義と課題」（『信州大学教育学部紀要』121，2008）

地理学専修

人間行動学専攻

専修紹介

地理学専修では、都市･経済地理学、文化･社会地理学、政治地理学、地理情報論といった地理学の広範な分野を学ぶことが可能です。研究環境はハード、ソフト面できわめてよく整備されており、少人数教育が行われています。また教員と院生、院生同士、他専修や他大学院との自主的研究会活動もさかんです。当専修ではフィールドワークの力を備えた、現代世界の課題に鋭敏で、総合的な思考力と行動力をもった院生を育成することを目標としています。海外の大学との研究交流も盛んで、留学生も積極的に受け入れています。これまで多くの他大学出身学生を受け入れてきた経験を持ち、包容力ある指導のもとで、すでに30名以上が大学等の研究職に就き、人文地理学における関西の拠点大学院の一つとして研究・教育・社会貢献・国際交流の面で実績を積み重ねてきました。

かつて教室創設者の村松繁樹教授を中心に、富山県の礪波平野散村や五箇山山村の共同調査が実施されて以来、野外調査を基本とする研究方法は、当教室の重要な伝統となっています。また新旧教員や卒業生による都市大阪とその周辺における地理学的研究の蓄積も重ねられており、それらの成果は『日本の村落と都市』（1969、ミネルヴァ書房）、『アジアと大阪』（1996、古今書院）などの単行本や、『空間・社会・地理思想』の逐次刊行に示されています。また、海外調査研究の面でも、アジア･ヨーロッパ･アメリカなどで現地調査に携わったスタッフを擁し、COE、GCOE、GP、COC、頭脳循環などのプログラムに関わりを持つ教員も多く、国際的な広がりを持った教育・研究が実施されています。

教育方針

前期博士課程の院生は、演習を主体とした授業を受けつつ、修士論文の執筆に力を注ぎます。後期博士課程になると、学会での口頭発表と学会誌への学術論文の投稿が義務づけられ、国際学会での発表も奨励されます。院生の研究テーマに特に制約はありませんが、最近は都市研究を専攻する者が多いようです。前期・後期課程とも正・副2名の指導教員が就き、マンツーマンのきめ細かな指導を心がけています。後期博士課程3年次を終えると、課程博士の学位を請求することができます。本専修では原則としてレフェリーのある学術雑誌に掲載された論文が3編以上あり、400字詰め原稿用紙に換算して300ないし400枚以上の分量のオリジナリティに富んだ内容を持つ論文を、所定の提出日までに提出することを条件としています。1999年以降、計17名が博士（文学）の学位を取得し、大学ほか研究機関にて研究者として活躍しています。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/

専修の特色

教室行事

教育・研究に関する専修の行事として、教員・大学院学生全員が参加する大学院合同ゼミを月に1回の割合で開催しています。ここでは、前期博士、後期博士課程の大学院学生による研究発表をもとに、活発な討議が行われます。このほか、6月初旬には教室メンバー全員が参加する春季巡検（日帰り）、2月中旬には卒論修論発表会・予餞会が開催されます。

出版物

『空間・社会・地理思想』（1996年～、年1回刊行）

その他の特色

大学院学生は、人文地理学会を中心に学会発表、論文投稿など、活発に活動しています。学内の都市文化研究センターや都市研究プラザの研究員として活躍する者も多くいます。

所属教員

大場　茂明（都市政策、ドイツ地域研究）
水内　俊雄（都市社会地理学）
山﨑　孝史（政治地理学、沖縄研究）
祖田　亮次（人文地理学）
木村　義成（地理情報システム）

大場 茂明　教授

OBA Shigeaki

専門分野

地理学・地域研究

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

ヨーロッパ地誌、ならびに土地・住宅政策を中心とする近現代ドイツの都市研究を専門としています。ルール地域、ハンブルク市など、大都市圏内のインナーシティや郊外住宅団地を主要なフィールドとして現地調査を行っています。また、歴史的建造物の保全と活用など、地域資源を活かした都市再生にも関心があり、最近では地元市民団体と協力しながら、大阪市内をはじめとする日本国内でのまちづくり事業に関わっています。研究室には海外からの研究者の訪問も多く、国際的・学際的な雰囲気に溢れています。

メッセージ・教育方針

「制度や政策が空間に如何に投影されるか」というテーマに長年関心があり、それを実地で観察・理解するために、現場でのディスカッションを重視します。「地理学は理論と実践とが有機的に結びついてこその学問である」と信じていますので、皆さんにも積極的に国内外に足を運んでほしいと願っています。

［主要業績］

［著書］『近代ドイツの市街地形成―公的介入の生成と展開―』（ミネルヴァ書房，2003）
『欧米の住宅政策―イギリス・ドイツ・フランス・アメリカ―』（ミネルヴァ書房，1999，共著）

［論文］「再都市化の進行にともなう地区居住施策の展開－ハンブルク大都市圏を事例として－」（『日本都市学会年報』50，2017）
“Osaka: Vergangenheit und Gegenwart der japanischen Handelsmetropole”（*Hamburger geographische Studien* No.49, 2001, Institut für Geographie der Universität Hamburg）

水内 俊雄　教授

MIZUUCHI Toshio

専門分野

都市社会地理学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

1. 近代都市史、地域形成史を資料フィールドワークと現地ヒアリングなど通じて再現する地域の歴史地理学的アプローチや、より地理思想的な観点に立つ政治地理、地政学的実践の解明。2. 都市の住宅問題や住宅政策の歴史を都市計画や社会福祉を視野に入れながら現代的なハウジング研究、あるいはコミュニティの再生やまちづくり、地域づくりの関する研究で、中山間地も対象としている。3. 東アジア（日本、韓国、台湾、香港など）を中心にホームレスや生活困窮者支援のNPO／NGO、施策形成に関わるアクターとインナーシティ再生に関わる研究、が主なフィールドである。

メッセージ・教育方針

資料フィールドワークでも、アクションリサーチ型フィールドワークでも、現場での生身のコミュニケーションや向き合うことをベースにしつつ、常にエビデンスベースで社会的実践につながってゆく研究をバックアップする教育を行っている。個人研究を重んじつつ、社会が要請している課題に対する共同研究も数多く実施する国際的研究チームを研究員、院生、卒論生とで常に動かしている。

［主要業績］

［著書］『モダン都市の系譜―地図から読み解く社会と空間』（ナカニシヤ出版，2008，共著）
『空間の社会地理』（朝倉出版，2004，編著）

［論文］“Homelessness, housing insecurity and social exclusion in China, Hong Kong, and Japan”,（*City, Culture and Society* 1-3，2010）
“The new mode of urban renewal for the former outcaste minority people and areas in Japan”,（*Cities* 27-S1，2010）
「脱ホームレス支援からみたアジアンハウジングの最先端」（『建築雑誌』vol. 128，2013）

山﨑孝史　教授

YAMAZAKI Takashi

専門分野

政治地理学、沖縄研究

最終学歴 ▶ 米国コロラド大学地理学部大学院

学　位 ▶ Ph.D.

［研究内容］

研究領域は人文地理学、特に政治地理学と地政学、そして沖縄研究です。グローバル化や国際情勢の変化が特定の場所で活動する組織や生活する人々にどのような政治的行動を惹起させるのかに注目しています。少し抽象的に言うと、マクロな政治経済的構造がミクロな行為主体の行動とどのような関係を持つかを考察しています。具体的には、国内外での政治地理学の展開を跡付けながら、日本（大阪）や沖縄（沖縄島中北部）を事例として研究しており、特に沖縄では米軍基地をめぐる社会運動、選挙、跡地利用・再開発というテーマに取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

文献を渉猟して理論的理解を深めるとともに、インテンシブなフィールドワークによって実証的に考察するというアプローチをとっています。国際比較を行うなど、広い視野から対象に接近する姿勢を奨励し、その成果を国際的に発信する指導を心掛けています。政治を地理学の対象から排除せず、一緒にフィールドで考えてみましょう。

詳しくは
http://polgeog.jp/ 参照。

［主要業績］

［著書］『政治・空間・場所―政治の地理学にむけて［改訂版］』（ナカニシヤ出版，2013）

［論文］“Reemerging Political Geography in Japan”（*Japanese Journal of Human Geography* Vol. 64 (6), 2012, The Human Geographical Society of Japan, co-authored）

“The US Militarization of a 'Host' Civilian Society: The Case of Post-War Okinawa, Japan”（S. Kirsch and C. Flint eds. *Reconstructing Conflict: Integrating War and Post-War Geographies*, 2011, Ashgate, Surrey, UK）

「軍民境界都市としてのコザ―暴動の記憶とアイデンティティ」谷富夫ほか編『持続と変容の沖縄社会―沖縄的なるものの現在』（ミネルヴァ書房，2014）

「知事・市長意見交換会の言説分析からみた大阪都構想」（『市政研究』第 173 号，2011）

祖田 亮次　教授

SODA Ryoji

専門分野

地理学・地域研究

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

現在までの研究の関心事項は、以下の諸点である。1. 東南アジア少数民族の移動（都市－農村間移動、生態的移動、国際／越境移動）、2. 熱帯地域における土地・資源利用と管理をめぐるポリティクス、3. 日本およびアジアにおける河川流域学と災害文化論。基本的には、人と自然との関係性を社会的・文化的・政治的な観点から考察することを前提としており、古代神話から開発行政、テクノロジーまでをも含みこんだ人間－環境関係論の再構築を目指す。

メッセージ・教育方針

我々が重視する現地調査には時間がかかります。短期間で調査を行い、データを取得し、それを分析して、論文執筆するには、事前の綿密な研究計画が必要になります。しかし「面白い」計画を立てるには、豊富な学問的知識と豊かな想像力が必要です。既存文献の読み方から研究の進め方まで、トータルで考える機会を提供します。

［主要業績］

［著書］“*People on the move: rural-urban interactions in Sarawak*” (Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2009)

『資源と生業の地理学』（海青社，2013，共著）

『ボルネオの〈里〉の環境学―変貌する熱帯林と先住民の知』（昭和堂，2013，共編著）

［論文］“Development policy and human mobility in a developing country: voting strategy of the Iban in Sarawak, Malaysia”（*Southeast Asian Studies* Vol.40-4, 2003）

「多自然川づくりとは何だったのか？」（『E-Journal GEO』7 巻 2 号，2012，共著）

木村 義成　准教授

KIMURA Yoshinari

専門分野

地理情報学

最終学歴 ▶ 新潟大学大学院医歯学総合研究科

学　　位 ▶ 博士（学術）

［研究内容］

わたしの専門は「地理情報学」です。地理情報と聞くとイメージがつきにくいかもしれません。皆さんが住む世界のあらゆる情報は「地理情報」として扱われており、現在、様々な学問分野で「地理情報」が活用されています。特に、わたしは保健医療分野での「地理情報」の活用を研究課題としています。具体的には、より良い救急医療や災害医療に向けて、医療、地物、人口統計などの様々な地理情報を用いて、地理情報システム（GIS）を用いて可視化や分析を行っています。

メッセージ・教育方針

地理情報は様々な研究分野で活用されています。例えば、社会学ではライフスタイルや社会経済的な特性による住民の棲み分けが国内外で、どのような違いがあるか？など、地理情報を用いた分析が行われています。地理学のみならず、空間や地域に関わる研究に興味のある方は、わたしが提供している講義や実習にご参加ください。

［主要業績］

［論文］“Is Location Associated With High Risk of Hypertension? Shimane COHRE Study”（*American Journal of Hypertension* vol. 25(7), 2012, T Hamano, Y Kimura, et.al.）

“Use of a Geographic Information System (GIS) in the Medical Response to the Fukushima Nuclear Disaster in Japan”（*Prehospital and Disaster Medicine* vol. 27(2), 2012, T Nagata, Y Kimura, and M Ishii）

“Geodemographics profiling of influenza A and B virus infections in community neighborhoods in Japan,”（*BMC Infectious Diseases* vol. 11(36), 2011, 共著）

「地理情報システム(Geographic Information System; GIS) を用いた島根県における救急搬送カバー率に関する検討」（『日本農村医学会雑誌』Vol.60-2, 2011, 共著）